

被災産地の被害の状況と現状について

(独)農畜産業振興機構
野菜需給部

被災産地の被害の状況と現状について① (福島県すかがわ岩瀬地区)

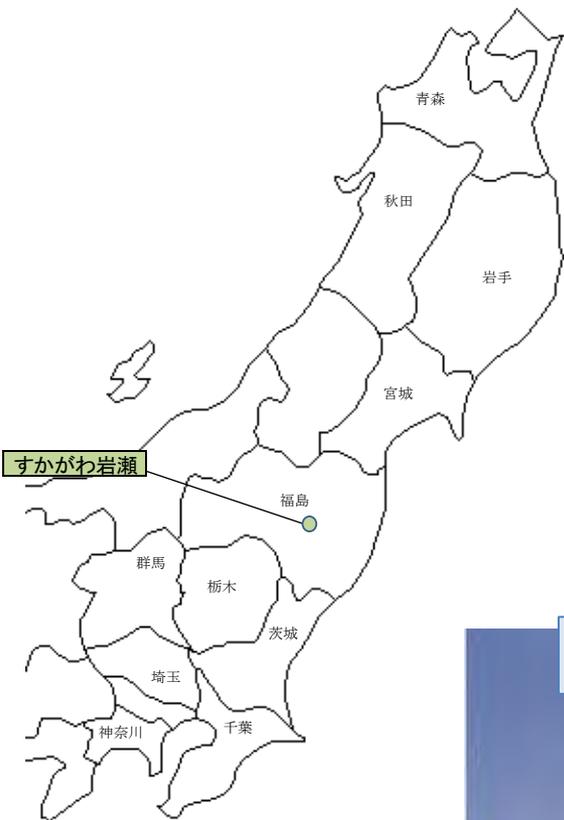
すかがわ岩瀬地区(夏秋きゅうり)

全国80カ所の夏秋きゅうりの指定産地の中、
第1位の出荷量を誇る大産地。

きゅうり

出荷期間	露地(6月中旬～10月上旬)、抑制(8月下旬～12月上旬)
作付面積	合計:169ha(須賀川市:124ha、鏡石町:34ha、天栄村:11ha)
出荷数量	10,741トン(夏秋きゅうりにおける全国の約8%、福島県の約29%)
収穫農家数	512戸
出荷先	関東48%、近畿25%、東北22%、東海5%

※農林水産省資料等から機構が作成。



大型選果場「きゅうりん館」



平成8年3月稼働の日量最大90t処理できる大型自動選果施設。きゅうり栽培農家は、収穫したきゅうりを専用コンテナに詰め、施設に搬入。生産農家における選果、箱詰め作業の省力化が図られました。

すかがわ岩瀬における被害の状況

被災内容	被害状況及び復興状況	被災データ等
ため池(藤沼ダム)の決壊	地震により藤沼ダム(高さ約18 [㍎] 、長さ約133 [㍎])が決壊、150万トン近い水が鉄砲水となって流出。 復旧は手つかずの状況。水源としては、このほか羽鳥湖があるが、通水パイプが各地で破損し、通水ができず、一部の地域でコメの作付ができない状況。 → 取材したJAすかがわ岩瀬の野菜協議会(部会)会長の谷津光一氏も本年はコメの生産ができず、きゅうりのみの生産。	死亡者7名、行方不明者1名。 家屋:19棟全壊、 床上・下浸水55棟
選果場(きゅうりん館)の機能停止	地震により管内唯一の選果場である「きゅうりん館」の選果機のラインが稼働不能。停止していた選果機は、調整・復旧に約3か月を要し、ようやく6月15日に修復、一部稼働。	
定植の遅れ	原発事故の影響により、県による土壌検査が完了するまで定植ができず、出荷は1週間から10日程度の遅れる見込み。他産地との競合による価格低落が懸念される。	
風評被害	谷津氏は、きゅうりの収穫に忙しい中、風評被害払拭のため、各地の市場や実需者を回って営業活動を行っている。学校給食等で一部納品できないケースがある一方、応援したいとの声もあり、手ごたえを感じている。	

【須賀川市被害状況】

- (1) 人的被害: 行方不明者1名、死亡者10名
- (2) 家屋被害: 住宅(全壊383件、大規模半壊130件、半壊611件)、
非住宅(全壊446件、大規模半壊150件、半壊351件)、一部損壊(12,222件)
- (3) 物的被害: 市道被害494件、橋梁被害5件、河川被害2件、マンホール被害558件、ため池96件など

震災による藤沼ダムの決壊

震災前の藤沼ダム



震災により決壊した藤沼ダム



震災による被害状況

土砂崩れの現場



地震により隆起して
しまったマンホール



機能停止となった「きゅうりん館」



繊細なハイテク機能を有する選果機のラインが機能停止状態となり、再稼働するまで3か月を要した。



被災しながらもきゅうり生産に精を出す生産者

(JAすかがわ岩瀬野菜協議会(部会)会長の谷津氏ご夫妻)

地震の影響により、水源が確保できず、今年はコメの作付は断念しました。きゅうり一筋で頑張っています。風評被害が起きぬよう部会長として市場や実需者を回っています。



東北地方の産地は、きゅうりの生産・出荷に全力投球

震災により停止していた選果場も、6月15日から一部稼働、7月からは本格稼働。節電の夏、「東北のきゅうりで、夏を涼しく。キュウリビズ」と銘打って、東北地方の産地は頑張っている。



被災産地の被害の状況と現状について② (宮城県亘理地区)

宮城県亶理地区(いちご)

ハウスいちごの栽培は、昭和45年から始まり40年の歴史。東北の湘南と言われ冬温暖、日照多く、海岸沿いは砂地の畑が広く平坦。宮城県内のいちご出荷量の85%を占める東北一の大産地。県内の単収が2.9トン/10aであるのに対し、亶理地区は3.5トン/10aとなっており、気候・土壌のみならず技術も卓越した地域である。



いちご

出荷期間	11月～6月
作付面積	合計:96.04ha(山元町:37.75ha、亶理町:58.29ha)
23いちご年度販売計画	3,800トン、38億円
生産者数	380名
出荷先	宮城県内、北海道東北市場、京浜市場

ハウス施設被害と生産者

	生産者数	被災した生産者	面積	被害面積
山元町	129名	124名(うち犠牲者10名)	37.75ha	36.94ha(97.8%)
亶理町	251名	232名(うち犠牲者11名)	58.29ha	54.46ha(93.4%)
合計	380名	356名(うち犠牲者22名)	96.04ha	91.40ha(95.1%)

(うち皆無面積78.63ha、
海水冠水12.77ha)

震災及び津波による被害状況

地震直後17mを超える津波が黒い壁のようになって亘理地区を飲み込み、4km内陸まで達しました。一瞬にして、家屋、ビニールハウスなどは流され、いちご農家の9割以上が被災しました。



※ 家屋・ハウス・農機具など全て失った生産者も多く、生産復旧の目途が立たず、がれき運搬のダンプの運転手などで収入を得ている方もいる。



被災したハウス・選果場など

いちごハウスがあった跡地。跡形もなくなっていました。



被災した選果場。津波によるヘドロは取り除きましたが、選果機は壊れたままです。



生産も生活も壊滅的な被害を受けた中、復興のシンボルとして少しでもいちご生産を再開し、クリスマスの最需要期に間に合わせようと、JAみやぎ亘理を始めとして地区をあげて取り組まれています。何とか残った16ha(うち冠水12ha、無事4ha)と新規造成分4haを合わせて20haの確保に目途が立ったところですが、除塩などの作業や営農資金など解決すべき問題は山積しています。(現地では、全体的な復興が進まない中で、いちご生産が容易に再開できるかのような報道に対するいらだちもみられました。)



共同育苗施設

クリスマスに出荷することを目標に、苗を確保するため生産農家5人共同で農協の水稲用育苗施設を借り、育苗作業を行っています。水源は地下水ですが、地震の影響により朝くみ上げた地下水は午後には鉄分が酸化し濁ってしまうなど、厳しい状況下で取り組まれています。



品種は、「とちおとめ」と宮城独自の品種「もういっこ」。宮城の品種がようやく5割を超えたばかりの時期におきた震災でした。



いちご苗は、6月13・15日に栃木県から30万本提供。福島県から10万本、県内から30～40万本、今後、栃木県から100万本の苗が提供される予定となっています。他県からの協力もあり、苗の確保の目途は立ちました。苗の生産者への配分など現在では、ボランティアが重要な役割を演じています。

奇跡的に残ったビニールハウス

津波で周辺の施設・家屋が津波に流される中、奇跡的に土生正光さんのいちごハウスは残っていました。



ハウス内にも津波による海水が80cmの高さまで流れ込みました。加温用の機器や養液装置などは海水を浴びすべて壊れてしまいました。土生さんは、津波により自宅は流されてしまいましたが、震災直後からハウス内のヘドロの除去作業を行っています。車・機械が全く使えない中での作業は、すべて手作業でした。



作業を手伝うボランティアの方達。現在では、復旧作業にはボランティアの存在が必要不可欠です。平日は他県のJA職員、週末は一般のボランティアが作業を手伝っています。

育苗作業

土生さんは、50aのいちご施設をもっていました、何とか残ったのは30a。この面積では、後継者に給料が出せず、後継者は今は他の仕事についています。



9月初旬の定植、11月の出荷を目指し、親株からとった苗の育苗作業に取り組んでおられます。

